あろわにあ ～Arowania な日々～

佐藤 透

熱帯魚は 1991 年に開業して以来のお友達で、飼育暦もはや 15･6 年になる。近場のホームｾﾝﾀｰで 600x450x300mm の水槽ｾｯﾄを買ってきて、玄関靴箱の上に設置したのが、つい先日のことのように思えるけど。最初はｸﾞｯﾋﾟｰ（guppy）やﾈｵﾝﾃﾄﾗ(neon-tetra)、ｸﾞﾗｽ･ｷｬｯﾄ(glass-cat)などを少しずつ飼いはじめた。子供の頃、親父さんの診察室には熱帯魚の水槽があって、青いきらきらとしためだかっぽい小魚（たぶんﾈｵﾝﾃﾄﾗ）が群れ成し泳いでいた光景に見覚えがある。やっぱり“蛙の子”なんだろうか？

それ以来、小魚から始まって、底物ﾌﾟﾚｺ（pleco）から定番のﾃﾞｨｽｶｽ（discuss）までひといきに飼い込んだ。ﾍﾟｱ繁殖にも挑戦してｴﾝｾﾞﾙﾌｨｯｼｭ（angel-fish）やﾃﾞｨｽｶｽも大量に子が孵り、ﾋﾞｰｼｭﾘﾝﾌﾟを与えて育てた。無数の子魚は青い蛍光灯を浴びて、夜空に輝く星座か天の川のように天空を舞い踊る～しばし水槽を眺めて疲れを癒し、寝酒をあおることもあった。病院 3 階の自宅には 1200x450x450mm の水槽が 2 本縦積にされ、その重みで床が陥凹して、そういえば壁と床の隙間を補修したっけな。

熱帯魚の月刊誌には、1967 年創刊のﾌｨｼｭﾏｶﾞｼﾞﾝ、Fish Magazine (愛称=ﾌｨｼｭﾏ)（www.pet-honpo.com/cgi-bin/fishv.cgi）と 1979 年創刊のｱｸｱﾗｲﾌ、Aqua Life (通称=ｱｸﾗ)の 2 誌が綿々と発刊され、いずれも年来の愛読書となっている。一歩のめり込んで、ﾏﾆｱｯｸなｱﾛﾜﾅ専門誌には、台湾系は鳴美のﾌﾟﾗﾀﾊﾟｯﾄﾞ（Pratapad）と和製のｱﾛﾜﾆｱ（Arowania）があって、こちらも年間購読者となっている。ｱﾛﾜﾅ養殖業者（breeder）の現地情報が満載され、これぞっていう自慢のｱﾛﾜﾅの写真がちりばめられて、眺めているだけで視界いっぱいの幸せがやってくる。だけど、ﾌｧｰﾑ(farm)での飼育ﾉｳﾊｳや新たなｱﾛﾜﾅ系統の創り方など、超ﾏﾆｱｯｸな内容には到底ついていけない。

そのなかで、時折載っているｱﾛﾜﾅ座談会は気軽に読めるお楽しみｺｰﾅｰである。座談会誌上に登場するﾏﾆｱには、東京ﾍﾞｲ（http://www.asia-bay.com/index.html）は赤井龍一氏、ｱﾛﾜﾅ鑑定士なんかで売れている華やかな人もいるけれど、控えめで玄人職人っぽいﾗﾌﾚｼｱ（http://www.arowana.jp/）は福井健人さんに好感が持てた。さっそくｲﾝﾀｰﾈｯﾄで埼玉県はﾗﾌﾚｼｱを検索して、出来立てのﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞからｼｮｯﾌﾟに電話を入れて近況を尋ねた。どうやら奥さんとふたりでｼｮｯﾌﾟをはじめたばかりで、熱のこもった長話となった。しかるに手持ちのｱﾛﾜﾅ在

庫はなく、暮れに現地ｲﾝﾄﾞﾈｼｱのﾌｧｰﾑに飛んで、年明け早々にも 150 匹が航空便で輸入されるって話し。その中には黒々とした真っ赤で紅色に染まるという紅龍のﾒﾀﾙ・ﾚｯﾄﾞ、Metal-Red (F3)も届くという。14cmほどの生後数ヶ月の個体でお値段は？って尋ねると～¥●●万円なりって、ｴｴｯて思ったけど気を取り直して、お安くなりますかﾌﾟﾗｲｽﾀﾞｳﾝ？まけられないって、ｵｲｵｲｯ、ほかにお買い得はなにかある？ﾃﾞｨﾝﾐｶ・ｶﾌﾟｱｽのﾀﾞｲﾅﾐｯｸ・ｽｰﾊﾟｰ・ﾚｯﾄﾞ、dynamic super-red これはその半値だって、して背中まで金色の鱗捲く過背金龍、Malaysian-golden はどう？ｱｸｱ・ﾘｰﾀﾞｰの AAAA ｸﾗｽなら 15cmもんでその 2 倍のお値段、う～んちょっと予算を考えてまた相談させてもらうからって電話を置いた。

憧れは、真っ赤っ赤の紅龍と金きら金の過背金龍たちが競演する夢の混泳水槽～まずは 1500x900x900mm 水槽で数匹のｱﾛﾁ（あろわなのﾁﾋﾞのこと）から混泳させてみようって考えていた。ｱﾛﾜﾅは縄張りを持つ魚で、2-3 匹ではいずれかが死ぬまで喧嘩するから、一匹飼いで飼い込むか、混泳するにはせめて 5-6 匹は欲しいところ。もんもんと思案投げ首していても始まらないって、おなじみのｼｮｯﾌﾟにでかけた。それならうちでお取寄せしましょうかって。ｼｮｯﾌﾟの“おじさん”と仲良しになると業界内部の事情がよく分かる。取引の開始はまずはお電話から、～相手を喰ったようなそれっぽいﾍﾞﾃﾗﾝな話しぶりに面食らったようすの相手方～ひと通りのお話しに世間話も交えてのご挨拶が済んだ。

ｼｮｯﾌﾟの確認には店判（みせばん）が要るって。お店の名前住所電話番号などが記載されたﾊﾝｺを押して fax すると、さっそく卸しの値段の入った在庫ﾘｽﾄが fax-back されてきた。この前聞いた話とえろぅ違うでぇ、ﾒﾀﾙ・ﾚｯﾄﾞ、ﾀﾞｲﾅﾐｯｸ・ﾚｯﾄﾞ、過背金龍いずれも半額ちょいじゃないの。通常、掛値は 2 倍+運賃、ってことはｱﾛﾜﾅの元値は定価の半値足らず、そうなると業者の買付け元手は、分からないけど微々たるもんじゃろな。3 ヶ月毎にｲﾝﾄﾞﾈｼｱやﾏﾚｰｼｱのﾌｧｰﾑにでかけて現地視察して、“日本でﾌﾞﾗﾝﾄﾞつけて販売してやっから”って独占契約をとっては買い叩いて来るらしい。かつては買付けﾙｰﾄが暴力団や国際ﾏﾌｨｱの資金源となっていたけど、いまは華僑が仲介して素人さんでものこのこ出かけているらしい。昨今は好景気の中国(本土)や香港からの買付け buyer が多くていくぶん品薄状態、自然と仕入れ値も上っているらしいけど。いずこの業界も胴元が一番にご利益（ごりやく）にあずかるってところかな。

案外の値段になんだか得したような気分で、結局ﾒﾀﾙ・ﾚｯﾄﾞx2、ﾀﾞｲﾅﾐｯｸ・ﾚｯﾄﾞx3、過背金龍x2 の若いｱﾛﾜﾅ 7 匹がﾗﾌﾚｼｱからの直送便（伝票請求はｼｮｯﾌﾟ経由で“おじさん”に掛値なしにってことで交渉）で届いた。それからは水槽のお掃除と水換え・餌やりが楽しい日課となった。毎週水曜日は午後休診、病棟廻診を終えると決まっての水槽掃除に頭を半分突っ込んで、布たわしでこすって苔や汚れを落として、上部濾過槽にﾊﾞｲｵﾊﾞｸﾃﾘｱの B-4 をぱらぱら撒布して、濾材の綿は月 1 回交換する。餌は冷凍赤虫を半分にこいで

餌食いを確認して追加する。

すくすくお育ちの秋篠若宮は悠仁親王(ひさひとしんのう)さまの如く、ｱﾛﾁも順調に生育してゆく。少し大きくなるとがぜん“こだわりの餌”となる。冷凍赤虫は手軽でばらして与えることができるし、冷凍庫で簡単にｽﾄｯｸ可能だけど、大きく育てるにはちと物足りない。やっぱり生き餌が要るなぁ。即席に大きく育てるには、5-6cmほどのｶｲｺのようなｼﾞｬｲｱﾝﾄ・ﾐﾙ・ﾜｰﾑがいいって。早速ﾌｧｰﾑから直接お取り寄せすることにした～値段交渉は大手よりも個人商店が便宜を諮ってくれる。専門誌に広告出してるｼｮｯﾌﾟ 3-4 店に電話して、“ｱﾛﾜﾅ 30 匹も飼ようるけぇこれからずうっと毎月 3-4Kg は要るようになると思うけど”ってすこしばかり偽装して吹かして。そいじゃぁ宅急便代引きでいくらになるかなぁって、例のｼｮｯﾌﾟのあるじの相手を喰ったような“のり”で交渉して、じゃぁとりあえず今回は 1Kg ばっか送ってみてぇってお安くまとめる。

色の揚がる専用ﾐﾙ・ﾜｰﾑの広告を見つけて早速東京は高田馬場のｼｮｯﾌﾟに電話した。そりゃぁお客さん赤いｱﾛﾜﾅ飼っておられるんなら、真っ赤に色揚げするんならってくすぐられて、少し割高だけど専用のﾚｯﾄﾞ・ｼﾞｬｲｱﾝﾄ・ﾐﾙ・ﾜｰﾑですよねって、さらりと言われて目から鱗。さっそく届いたﾜｰﾑだけど、真っ赤なﾜｰﾑと思いきや、どこからどう眺めて見てもいつものﾜｰﾑと変わらない、“いったいどこがちがうんじゃぃ”って文句を言ったら、そりゃぁﾜｰﾑに喰わしてるものが違う～ｶﾛﾁﾝ豊富な飼料をたっぷり混ぜてあるから大きくなると違いがはっきり出てくるってはぐらかされた。なるほど食物連鎖はあるやもしらねど～これってﾎﾝﾏｱかいなぁ？騙されたって思いたくはないけど、ｼﾞｬｲｱﾝﾄ・ﾐﾙ・ﾜｰﾑはいつものおなじみの倉敷のおばちゃんとこから“普通のﾜｰﾑ”をお取寄している。ﾜｰﾑは栄養価が高くみるみるﾃﾞﾌﾞるﾒﾀﾎﾞ餌だから、これだけじゃぁ健康によくないよね。

それなら、やっぱ定番の金魚＝餌金（子赤や姉金などの和金）がいいかな。毎月 1-2 回餌金（35 匹/￥1000）を喰わせることにした。餌金の中に混じったひれながのｺﾒｯﾄは別格でもったいない、選り分けて水庭に放して大きくする。さてさて色揚げにはやっぱり色物の昆虫つやつやﾃｶﾃｶってのがいい～こうろぎどうって。早速 60x45x45cmの網つき飼育箱を用意してﾌﾀﾎｼ・ｺｳﾛｷﾞ（特大）（100 匹/￥1,400）を仕入れて、“鈴虫の音色”なんてもんじゃないはるかにｳﾙｻｲ大合唱に“うるさ～い”って、きゅうりを入れて屋上に出していたら陽に当たって雨水が溜まって全滅、その死体の発する悪臭くさ～いには辟易した。それではって、鳴き声の小さいﾖｰﾛｯﾊﾟ・ｲｴ・ｺｳﾛｷﾞはどう?、確かに静かで玄関に置いたけど、夜通しｶﾞｻｺﾞｿｶﾞｻｺﾞｿこれも騒音、おまけに小粒でｱﾛﾁにとっては腹の足しにはならんぞなもし。極めつけは、ﾑｶﾃﾞはどうって、20-25cmもの立派な無傷の冷凍ﾑｶﾃﾞのﾊﾟｯｹｰｼﾞは Indonesia 産（10 匹/￥1,000）、あれぇこれ喰わんでぇｱﾛﾁもｹﾞﾃ物苦手なんじゃない。時折居間に出没するｺﾞｷﾌﾞﾘ

や廊下を這ってる本物のﾑｶﾃﾞは、ｷﾝﾁｮｰﾙ使わずに叩いてつぶして、芝庭をお散歩しているｼｮｳﾘｮｳ・ﾊﾞｯﾀやﾄﾉｻﾏ・ﾊﾞｯﾀ、はたまたｸﾏ蝉・ｱﾌﾞﾗ蝉などなどもｱﾛﾁの臨時のおやつになる。

ｻﾞﾘｶﾞﾆもいいらしいって、ふるさとの川に網を持って出かけてみても、このごろはおいそれとは捕まらない、小鮒どころかめだかｶﾀﾞﾔｼさえも網にかからない。ｱﾒﾘｶ・ｻﾞﾘｶﾞﾆ-L ｻｲｽﾞ(50 匹/￥1,400)は喰いっぷりも豪快でよろしいが、硬くてﾃﾞｶいﾂﾒは腸に刺さるからって取り除くのがてま、へまするとこちらがつねられる。ｽﾄｯｸの簡単なｱﾌﾘｶ・ﾂﾒｶﾞｴﾙはどうって、これもいいけど逃げ回ってｱﾛﾁが餌にありつくのにもひと苦労、水槽の中を当分の間生育していたけれどいつのまにやらいなくなった。食べられたのやら逃げ延びて庭にでたのやらさだかではない。

子飼いのｱﾛﾜﾅだけれども、一匹奇形が紛れていた。上顎が未発達で中途で終わって、下顎はめくれて下がってる～兎唇・ﾐﾂｸﾁって感じの過背金龍～ものはいいし、背中にも金ぴかがそろそろでてきそうなんだけど～口が開いた状態の“みにくい・醜い・見難い、みにく～いｱﾛﾜﾅの子”。見る人みなさんこれこれどうしたん大丈夫って心配してくれる。思い余ってｼｮｯﾌﾟに下取りに出して代わりに混泳ができるﾊﾟﾛｯﾄ・ﾌｧｲﾔｰ(炎のｵｵﾑ)とおでこｺﾌﾞのﾋﾟﾝｸのﾌﾗﾐﾝｺﾞを貰ってきた。ｼｮｯﾌﾟでは“おちょぼ口くん”の愛称で人気者になった。福山大学水産学部のﾊﾞｲｵｶﾙﾁｬｰ教室で矯正手術でもしてみようかな？無理かなって。

しかるに、ﾌｨｼｭﾏ(ﾌｨｯｼｭﾏｶﾞｼﾞﾝ)の今月・9 月号のｱﾛﾜﾅ特集～東京千代田区の逓信総合博物館で 7/14-16 行なわれた夏のｱﾛﾜﾅ・ﾎﾋﾞｰ・ｲﾍﾞﾝﾄ (Puratapad の鳴美主催)での“日本一のｱｼﾞｱｱﾛﾜﾅ・ｺﾝﾃｽﾄ”の結果が報告されている(佐々木浩之、鈴木仁：大ｼﾞｬﾝｸﾞﾙ展ﾚﾎﾟｰﾄ. Fish Magazine Vol. 498 (9): 63-70, 2007)。その記事のなかで、水族館でも見ることができない“怪魚十珍”のｺｰﾅｰに、なんとそっくりさんの紅尾金龍の写真が載ってるではないか。なんでも世界のｱﾛﾜﾅ 10 大珍魚に数えられる代物で、口が開いた状態は“いつでも福来る大変縁起のよい魚”として香港あたりでは“ふくちゃん”として大人気なんだって。購入元輸入業者のﾗﾌﾚｼｱに尋ねると、10,000～100,000 匹に出るか出ないかの貴重品ですよ、よかったですねぇって、過背金龍の福ちゃんなんて“ｱﾛﾁの福の神”探してもみつからないよって。こりゃこりゃ大～変ってなわけでさっそくに取り戻してきた。いまは何事もなかったように、他のｱﾛﾜﾅには目もくれず、いつもどおりに悠然と泳いでおられる。

2001 年に病院近くのこちらに引越して来て、書斎と車庫の間仕切りにでっかい水槽(3600x900x900mm)を嵌め込んだ。電気温水器から殺菌ﾌｨﾙﾀｰ経由での給水、ｵｰﾊﾞｰﾌﾛｰの大きな濾過槽、ｴｱﾚｰｼｮﾝ用のｴｱｱﾎﾟﾝﾌﾟ、夏場の過高温に冷却機などいろいろな仕掛けを装備した。水槽水換えは半自動で毎週 1/4 程度換水して、濾過槽にはﾊﾞｲｵﾊﾞｸﾃﾘｱの B-4 を毎回忘れずにぱらぱら撒布する。水の PH 合わせも難問で、大勢のお魚さんでは糞尿のためどうしても PH が下がるので、珊瑚(ｻﾝｺﾞ)の濾剤をたっぷり加えて PH6 程度にはしておく。

水槽の掃除は脚立に上って 2 週間ごとに紙布製のﾓｯﾌﾟでｱｸﾘﾙ壁を傷をつけないように丁寧に磨く、汗掻くこと 1 時間はゆうにかかるけれど～もっぷを突くのは Billy's Bootcamp にも似た心地よいｴｸｻｰｻｲｽﾞ。温度ｾﾝｻｰの不具合で加温できなかったり、水槽配水管のﾊﾞﾙﾌﾞを締め忘れて大水槽が干からび一歩手前になったこともあったし、水入れのまま出かけて帰ってみるとそこいらじゅう大洪水っていう失敗もいろいろとあったねぇ。でも、それなりになんとか解決できて来た。

水を創ること 3 週間、いまやｱﾛﾜﾅに成長したｱﾛﾁを一匹ずつ袋詰めして移動した。大きな水槽を優雅に、1/fゆらぎ（ﾋﾟﾝｸﾉｲｽﾞ＝ｱﾙﾌｧ波）のﾘｽﾞﾑで周遊するｱﾛﾜﾅたちを眺めていると、照明の色具合で泳ぐ場所によって微妙に鱗のﾃｶﾘが違う。こいつらとはこれからあと 15-20 年ものお付き合いとなるけれど、ぼちぼち本当の赤黒い紅色や金ぴかの金色もでてくるかな？ってほのかな期待を抱く。

ｱﾛﾜﾅ混泳はﾀﾞｲﾅﾐｯｸで見栄えがいいけど、ｱﾛﾜﾅの本能は縄張り争いの獰猛な魚～小競り合いはしょっちゅうで、噛みつきの本戦も時には起こる。そのため、どうしても尾鰭がばらけたり、胸鰭が欠けたり、なかには鼻ﾀﾞﾝｺﾞや口髭欠落事故も発生するけれど、そこはそれでぐっとぐぐっとぉ、がまん、う～んがまんじゃ。ｱﾛﾜﾅの持つ自然の純朴さに癒され、ｼｮﾊﾞを守る心意気に男心をほだされ、われ先にと競って餌を食む迫力に元気を頂戴する毎日である。　　（070911 記）